日 第684号
平成23年)
.日.15日)発行
,500円(1部1,050円)
120-8-139808
3年7月15日

THE KANKYO RYOKKA SHIMBUN
環境緑化新聞
http://www.interaction.co.jp

株式会社インタラクション
info@interaction.co.jp
東京都新宿区神楽坂5-37
〒162-0825 高村ビル2階
TEL：03-3267-4841
FAX：03-3267-4842
編集・発行人 井上 元

(2011.8.1)

岐阜造園

# ビオトープ大賞に輝く
# 「水土保全の森みたけ」に

㈱岐阜造園（小栗達弘社長）といえば中京圏最大のプロパーとして有名であるが、同時に造園業としても新しい分野へ取り組んでいる。この春、岐阜県御嵩町のビオトープ「水土保全の森みたけ」が日本ビオトープ大賞を受賞。この試みは昨夏、いきものにぎわい企業活動コンテストで高く顕彰され、地球環境に対する同社の真摯な企業姿勢を証明するものとして高く評価されている。造園の面から考えるなら、同社の高い技術、管理ノウハウがこれらの取り組みに大いに生かされているといえる。自然再生に対する意識、培われた技術。そういった面から探ってみる。（編集部）

## 協働による森林づくり

5月27日に岡山で開催されたビオトープ大賞表彰式には、同社の山口営業本部長が出席、NPO法人日本ビオトープ協会の吉川宏一前会長から表彰された。式後、山口本部長はフォーラムの中で「事例報告を行い、活動について紹介した。「水土保全の森みたけ」とは、岐阜県が推進する「企業との協働による森林づくり」に賛同し、岐阜県、御嵩町、同社の三者で協定を結び、平成21年3月から、岐阜県可児郡御嵩町の山林約14・7haを同社の資力により整備、間伐し、荒れた山林を豊かな里山環境へ自然再生しようという計画。ビオトープといえば、多くが水辺を中心に整備された例が多い。しかし、本来その目的は自然環境の再生であり、里山はじめ、河川、水田や畑などもその対象になる。そうした立地の持つ自然環境の潜在能力、可能性を引き出すことがビオトープ本来の目的といえる。また、人工的に整備されたビオトープには、「作ってしまえば後は荒れ放題」という事例もある。人工的な、造成して植物や生物を外から持ち込んだビオトープには違和感も生まれやすい。ビオトープ大賞の推薦文には、「ビオトープの原点に立ち返った取り組み」と高く評価されている。


県・町・岐阜造園3者の協定式（中央が小栗社長）


里山再生には地元ボランティアも協力

### 計数感覚と緑化哲学

このビオトープから は、同社の哲学を伺うことができる。

岐阜造園といえば、厳密で優秀な経営管理、コスト管理でも全国に知られており、将来の株式公開を目指して、内部統制、労務管理を進めている。また他産業、特にエクステリア、住宅販売とのコラボレーションを進める業界でも注目を集める企業だ。その企業哲学、事業はきわめて純粋で、緑化に熱心な姿勢で取り組んでいる。例えば最近流行をみせているのが屋上緑化、壁面緑化だ。ところが同社はそういった新しい技術よりも、既存の庭造り、森造りに熱心である。もちろん新技術に否定的、というわけではない。が、小栗社長は「財力のあるところはいいが、施工や維持管理に多額のコストがかかるため、自分たちとしてはそんなに薦めたいものではない」と難色を示す。いかにも計数感覚に優れた同社的と思えるが、「苗木を植えて、自然に育つのが最良。人工地盤では生きながらえるが、育ちの悪い木は敗れる。」という小栗社長の発言には自然とは、緑とはなんたるか。改めてその根本を考えさせられる。「いきものにぎわい企業活動コンテスト」で審査委員長を勤めた進士五十八氏も同社に対して、「そういった経営哲学を持っているからこそ、水土保全の森みたけという活動が出来るのかとわかった」とコメントした。厳密な管理と緑に対するしっかりとした考え方。これこそが同社の「哲学」とはいえないか。


授賞式に臨む山口本部長（右）

### 里山をどう管理するか

このビオトープにおいて中心になって作業するのは、30人前後の同社社員、そしてボランティア（写真上）。歩道沈閉アカマツ・広葉樹混合林内の除伐、ヒノキ人工林の間伐枝打ちなどを全員協力して行う。また、山菜やキノコの採取、さらに栽培を行って、かつて人間が活用し、共生していた里山の再生を目指している。

同社がこのビオトープの活動に関して重要課題としているのは、「植えることより伐る整備」。現在、日本中に放置された里山が多く存在する。このビオトープのみならず、多くの場所に共通することではないか。「今後とも着実の努力を続けていきたい」と、山口営業本部長は述べた。